

■ 書 評



うつ病の臨床： 現代の病理と最新の治療

神庭重信 編集
最新医学社
2016年7月 232頁
本体価格 3,500円＋税

本書は月刊誌「最新医学」に4年にわたり掲載された43の主要なテーマに関する論説をまとめたもので、改めて原稿を改訂して単行本化されたとのことである。前言において編者により「ある疾患の症候の時代的な変容への配慮は、時代に応じた診断や治療の最適化に繋がるという意味で、価値のある臨床行為である。」と述べられているが、今日のうつ病に関する日常診療に資するようにも意図されている。その内容は第1章 疾病について、第2章 治療について、第3章 サポート体制、第4章 新しいうつ病治療の4章と座談会の記録から構成されており、うつ病を取り巻く現代的な課題について、各領域の専門家による総論から各論を含めた42編の論説と座談会が編まれる形でうつ病の今日的な課題について包括した議論がなされている。

うつ病に関する最近の主なトピックスは現代型うつ病や双極性障害との関係であるが、本書では現代型うつ病（新型うつ病を含む）が全体の43編のうち、6編で論じられており、双極性障害については双極うつ病を含むと8編にも及んでいる。その一方で、薬物治療に関しては、5編に留まっており、しかもそのうち2編は新規の抗うつ薬に関するものであった。ただそれらの主要なポイントに留まらず、広範な領域において、多くの示唆的な内容が盛り込まれていたが、評者にはいくつかの視点が心に残った。

『第1章 疾病について』においては、「こころの風邪」はうつ病ではなく、適応障害と見なせること、その一方で、現代型うつ病は病気であり、怠けではないこと、さらに病気と認めた上で様々なアプローチ上の工夫を行いつつ「希望を処方」することが大切である

こと、また女性とうつ病では「弱り目に祟り目」というポイントがある点など疾病の理解に供すると感じた。

『第2章 治療について』では、軽症うつ病の治療には小精神療法（笠原）の導入が重要である点については最後の座談会の中でも取り上げられていた。その他、うつ病のゴールにおいて現実的な治癒では寛解を維持し、残遺症状をなくすことで治った状態に近づくこと、認知行動療法に関しては躁転によって肯定的な認知に転じることがあるため治療が奏功したと感じた際には双極性障害の可能性にも注意が必要なことや、森田療法については現代型うつ病に対しても工夫して適用するという視点で論じられるなど、実臨床につながる内容と考えられた。またうつ病の自殺予防に関してJoinerの『自殺の対人関係理論』の3項目（①獲得された自殺潜在能力、②所属感の減弱、③負担感の知覚）が自殺に関する今日までの主要な報告と一致性が高いことは印象的であり、自殺予防への1つの糸口になりうると考えられた。

そして、『第3章 サポート体制』では、“うつからの卒業”を目指して”という項で当事者の立場からうつ病の患者さんの家族が健康であることが大切で、そのための5つのポイントが示されていた。この点は家族の燃え尽きを防ぐことの重要性を述べており、「双極性障害の当事者会」において課題とされたスタッフの燃え尽き症候群と相通じているとも感じた。

最後の『第4章 新しいうつ病治療』では、経頭蓋磁気刺激（TMS）やTMSを応用した治療法、パーキンソン病の治療法としての脳深部刺激（DBS）の適用における課題が論じられおり、新たな薬物治療の可能性を含め、将来に向けて有効な治療法の進展が期待された。

本書はまた読者の興味や読み方によっては事典としての活用も可能で、多面的なニーズに応えるものである。今日的な時代の要請としてもうつ病に関する諸課題を多面的・包括的に取り上げたことの意義は小さくはない。また、うつ病に留まらず、他の精神疾患でもこのような方向性をもつ書籍が求められているとも感じられた。

(谷井久志)